

前冠方具

人の世に熱あれ
人間に光あれ

現代資本制の日本社会

我々の国を 我々と共に

政府が、「沖縄を返ってくる。戦後は終わった。」と言い、「新しい日本の門出万国博」「豊かな日本」をうたう中であつて、我々は、この「繁栄」の陰にある矛盾の、その象徴的な社会問題を諸君に提起したい。

江戸時代以後三百年、中でも明治百年間の重い差別の歴史、部落差別が現在もなき度たゞ存在し、日々拡大再生産されていることを諸君は知つてらるうら。

部落差別は、人々の渾めた意識や偏見だけの問題ではなく、現実、具体的に存在している。家庭の貧し

く故に、義務教育も満足に受けられない子供たち、もつとも劣悪な環境での労働あるいは失業をしいられている部落の労働者たちが存在する。住居をはじめ、生活環境にいたつても、たとえば、市大のすぐ横にある浅香塚名産は、人習の住居が大和川の河原にあり、人間の住むべきところに地下鉄の車庫があるとい状態である。政府がたとえ、人類の進歩をうたふうこと、我々は二のような社会矛盾の存在を承して見のがすことはできないし、これこそが日本の現実の姿であると考へる。

新入生諸君、諸君は高校で何を知つただろうか。共に学べき学友と「競争」し、それに勝つことに気をつかいはしなかつたか。脱落者を前提とした受験戦争とテスト教育は、諸君の頭の中に「優れた人」と「劣った奴」を作り出しはしなかつたか。教師達は、生徒の一人一人の生活環境もかえりみることなく、毎日丸腕を手伝わねばならない生徒や、勉強する机すらもない生徒を「宿題を忘れた」といって立たせたりしてきた。生徒の背景にある重い差別の実態を知らず、人を差別したり、軽蔑したりはしなかつただろうか。